

# 乳児期の子どものアタッチメント安定性と幼児期の社会情動コンピテンス —縦断的検討— (中間報告)

富山大学附属病院周産母子センター<sup>1</sup> 本 島 優 子

## Children's attachment security and socio-emotional competence from infancy to early childhood -A longitudinal study-

Maternal and Perinatal Center Toyama University Hospital MOTOSHIMA, Yuko

### 要 約

本研究は、乳児期における子どものアタッチメント安定性が幼児期の社会情動コンピテンス、特に情動理解と問題行動とどのように関連するのかについて縦断的検討を行うことを目的としたものである。生後18ヶ月にアタッチメントQソート法による子どものアタッチメント安定性の測定を行い、生後30ヶ月に子どもの情動理解の課題を行い、生後42ヶ月に子どもの問題行動について母親による評定を求めた。今後さらにデータ収集・分析を進め、生後18ヶ月における子どものアタッチメント安定性が生後30ヶ月の子どもの情動理解および生後42ヶ月の子どもの問題行動とどのように関連するのかについて分析・検討を行う予定とする。

【キー・ワード】アタッチメント安定性, 情動理解, 問題行動, 縦断研究

### Abstract

This longitudinal study examined the relationship between infants' attachment security and later socio-emotional competence, especially emotion understanding and behavior problems. Mother-infant Q-sort attachment security was assessed at 18 months. Children's emotion understanding (abilities to recognize facial expressions associated with happy, sad, angry emotions) was assessed at 30 months. Children's behavior problems were assessed by their mothers at 42 months. This longitudinal study is ongoing and the result will be reported in the future.

【Key words】 attachment security, emotion understanding, behavior problems. a longitudinal study

---

<sup>1</sup> 現所属：上越教育大学

## 問題と目的

子どもの安定したアタッチメントが種々の社会情動コンピテンスと関連することが知られている。たとえば、園田・北村・遠藤 (2005) によると、安定型の子どもは、社会的に有能で、クラスメイトに好かれており (Lafreniere & Sroufe, 1985)、共感性や仲間への社会的コンピテンスが高いこと (Kestenbaum et al., 1989; Verschueren & Marcoen, 1999)、また全般的に問題行動を示すことが少なく (Erickson et al., 1985)、他者の感情に高い関心や理解を示しやすいこと (Laible & Thompson, 1998) などが報告されている。しかし、これらの研究はすべて海外で行われているものであり、日本では未だ検討がなされていない。日本においても、子どもの安定したアタッチメントが社会情動コンピテンスと関連しうるのは、実証的に検証を試みる価値があろう。

そこで本研究では、日本における子どものアタッチメント安定性と社会情動コンピテンスとの関連性について、縦断的手法を用いて実証的検討を行いたいと考える。特に本研究では、社会情動コンピテンスとして、情動理解と問題行動について取り上げることとする。

まず、情動理解とアタッチメントとの関連について、これまでの研究で、アタッチメントが安定している子どもほど情動理解が良好であることが報告されている (Laible & Thompson, 1998; Ontai & Thompson, 2002; Raikes & Thompson, 2006)。たとえば、Raikes & Thompson (2006) の研究では、2歳のときにアタッチメント Q ソート法を用いて測定された子どものアタッチメント安定性が3歳になったときの子どもの情動理解を予測したことが明らかにされている。しかし、Raikes & Thompson (2006) の研究では、2歳時点での子どものアタッチメント安定性が測定されており、より早期の乳児期における子どものアタッチメント安定性に関しても、同様に後の子どもの情動理解と関連しうるのはか検討を加える余地があろう。

次に、子どもの問題行動とアタッチメントとの関連について、これまでの研究で、子どものアタッチメントと問題行動が関連することが報告されている (Erickson, Sroufe, & Egeland, 1985; Lewis, Feiring, McGuffog, & Jaskir, 1984)。たとえば、Erickson et al. (1985) によると、安定型の子どもは、回避型、アンビヴァレント型の子どもよりも、全般的に問題行動を示すことが少なかったという。また、Lewis et al. (1984) の研究でも、安定型の男児でもっとも問題行動が少なかったことが報告されている。こうした知見が日本における子どもに関しても確かめられるのかどうか検証を加える必要がある。

以上を踏まえて、本研究では、未だ日本では検証されていない乳児期における子どものアタッチメント安定性と幼児期の社会情動コンピテンス、特に情動理解と問題行動との関連性について、縦断的手法を用いて実証的検討を行いたいと考える。より具体的には、生後 18 ヶ月における子どものアタッチメント安定性と、生後 30 ヶ月における子どもの情動理解および生後 42 ヶ月における子どもの問題行動との関連性について検討することとする。

## 方 法

### 研究協力者

妊娠期を起点とした親子関係と子どもの発達に関する縦断研究に参加している関西（主に京都）・北陸（主に富山）地区在住の母子 38 組を対象とした。これまでの調査時期は、妊娠後期、生後 2, 6, 9, 18, 30, 42 ヶ月であり、本研究では、生後 18, 30, 42 ヶ月のデータについて報告する。

### 手続き

**Time1** 生後 18 ヶ月頃に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行い、母子間のアタッチメントの安定性の測定を行った。

**Time2** 生後 30 ヶ月頃に家庭訪問し、子どもに情動理解の課題を行った。

**Time3** 生後 42 ヶ月頃に各家庭に子どもの問題行動に関する質問紙を郵送し、回答後に返送してもらった。

### 測度

**子どものアタッチメント安定性** 生後 18 ヶ月に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約 2 時間程度の自然観察を行った。母親には普段通り過ごしてもらうようお願いし、普段家庭でその時間帯に行っていることをやってもらうようお願いした。遊び、昼食、おやつ、散歩、家事、買物など日常の生活場面について観察を行った。なお、観察場面についてはビデオカメラで録画を行った。観察終了後、観察中に見られなかった子どもの行動（留守番時や寝かせつけるときの様子など）について、母親から直接聞き取りを行った。訪問後、家庭でのビデオ観察をもとに、Waters & Dean(1985)のアタッチメント Q ソート法(AQS)を用いて、母子間の愛着安定性についての評定を行った。この手法では、子どもの行動について記述された 90 枚のカード（たとえば、項目 14:「新しく遊べるものを見つけると、お母さんの方に持ってきたり、離れたところからお母さんに見せたりする」など）を、それぞれ 1:「まったく当てはまらない」から 9:「非常に当てはまる」までの 9 段階に 10 枚ずつ振り分け、各カードにその段階の得点を付与する。そして、予め複数の専門家によって判断されたもっとも愛着が安定している子どもの基準配列の得点(Waters, 1995)と、実際の観察で得られた子どもの配列得点との相関を求め、Fisher の z 変換した値を子どもの愛着安定性得点とする。値は、おおよそ-1.00~1.00 をとり、得点が高いほど、専門家が想定した愛着が安定している子どもの行動パターンに近似することになり、愛着安定性の高さを意味する。

**子どもの情動理解** 子どもに 3 枚の表情の絵（笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔）を呈示し、「悲しいときのお顔はどれ？」と質問し、3 枚の顔の絵から一枚選択させる課題を行った。喜び・怒り・悲しみの情動に関して、それぞれ 2 試行ずつ、計 6 試行ランダムな順序で実施した。そして、正答を 1 点、誤答を 0 点とし、合計得点を算出した。

**子どもの問題行動** 子どもの問題行動を把握するため、Achenbach(1992)の Child Behavior Check List/2-3(CBCL, 2-3 歳用)を使用し、母親による評定を求めた。CBCL は子どもの情緒的および行動的な問題を評価するための 100 項目から成るチェックリストであり、記述された子どもの行動について 3 件法（0:「当てはまらない」～2:「よく当てはまる」）で回答するものである。チェックリスト

は不安・抑うつ、引きこもり、睡眠の問題、身体の問題、攻撃的行動、破壊的行動の6つの症状尺度とその他の問題尺度から構成される。うち、攻撃的行動と破壊的行動の合計得点が外在化問題(Externalizing)、不安・抑うつと引きこもりの合計得点が内在化問題(Internalizing)として分類される。本研究では、この外在化問題尺度と内在化問題尺度のそれぞれの得点を算出し、分析に用いた。

## 結果と考察（今後の予定）

生後18ヶ月に測定された子どものアタッチメント安定性が生後30ヶ月における子どもの情動理解、生後42ヶ月における子どもの問題行動とどのように関連するののかについて分析・検討を行う予定である。

## 引用文献

- Achenbach, T.M. (1992). *Manual for the child behavior checklist/2-3 and 1992 profile*. Burlington, VT: University of Vermont Department of Psychiatry.
- Erickson, M.F., Sroufe, L.A., & Egeland, B. (1985). The relationship between quality of attachment and behavior problems in preschool in a high-risk sample. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 147-166.
- Laible, D.J., & Thompson, R.A. (1998). Attachment and emotional understanding in preschool children. *Developmental Psychology*, **34**, 1038-1045.
- Lewis, M., Feiring, C., McGuffog, C., & Jaskir, J. (1984). Predicting psychopathology in six-year-olds from early social relations. *Child Development*, **55**, 123-136.
- Ontai, L.L., & Thompson, R.A. (2002). Patterns of attachment and maternal discourse effects on children's emotion understanding from 3 to 5 years of age. *Social Development*, **11**, 433-450.
- Raikes, H.A., & Thompson, R.A. (2006). Family emotional climate, attachment security and young children's emotion knowledge in a high risk sample. *British Journal of Developmental Psychology*, **24**, 89-104.
- 園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦. (2005). 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がりと連続性. 数井みゆき・遠藤利彦(編), *アタッチメント: 生涯にわたる絆*(p.67). 京都: ミネルヴァ書房.
- Waters, E. (1995). The Attachment Q-Set. In E. Waters, B.E., Vaughn, G. Posada, & K. Kondo-Ikemura(Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **60**(2-3, Serial No.244). 247-254.
- Waters, E., & Deane, K.E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood.

In I. Bretherton, & E. Waters(Eds.), Growing points of attachment theory and research.  
*Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50(1-2, Serial No.209), 41-65.

